

令和8年度 晩生品種「新之助」栽培暦

JAえちご中越ながおか新之助研究会(令和8年3月作成)

【新之助 食味・品質基準】

- 整粒歩合 70%以上(農産物検査等級 1 等相当)
- 水分含有率 14.0%以上、15.0%以下
- 玄米タンパク質含有率 6.3%以下(水分 15%換算)

【品種の特徴】

- 出穂期及び成熟期は「コシヒカリ」に比べ 6 日および 7 日程度遅い晩生種
- 極良食味で高温耐性が強い
- 草型は偏穂数型、耐倒伏性はやや強、穂発芽性は中程度
- いもち病ほ場抵抗性は、葉いもちにやや弱く、穂いもちに弱い

【生育のめやす(稚苗育苗、5月中旬移植)】

生育ステージ	葉数 (葉)	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉色 (SPAD)
最高分けつ期(7月2日頃)	10.0~11.0	40~44	560~610	36~39
幼穂形成期(7月19日頃)	11.5~12.5	62~68	460~510	33~36
1回目穂肥時(7月21日頃)	—	64~71	450~500	33~36
2回目穂肥時(7月30日頃)	—	—	—	33~36
出穂期(8月10日頃)	13.5~14.5	稈長 78	380~410	34~36

【収量構成要素及び品質の目標】

目標収量	540kg/10a
穂数	390本/m ²
一穂粒数	72粒
m ² 当たり粒数	28,000粒
精玄米粒数歩合※	82%
千粒重	23.5g
整粒歩合	70%以上
玄米タンパク質含有率	5.8%(上限 6.3%)

※玄米 1.9mm 以上粒数/全粒数 x100

【主な作業と生育ステージ及び管理のポイント】

月日	4月			5月			6月			7月			8月			9月		
	20			10 20			10 20			10 20			10 20			10 20		
主な作業と生育ステージ	播種			田植え			中干し			最高分けつ期	穂肥① 幼穂形成期	穂肥②	出穂期			落水	収穫成熟期	

基肥施用	田植え	中干し・溝切り	病害虫防除	穂肥施用と登熟期の水管理	収穫・乾燥・調製
<ul style="list-style-type: none"> ・地力に応じて完熟発酵ケイフン(みやぎ有機機)、ケイ酸質肥料等で土づくりを図る。 ・基肥量は 10a 当たり窒素成分で 3kg をめやす。 ・大豆後、基盤整備後、秋落ち田では作付けしない。 ・多肥多収栽培は厳に慎み、高品質米生産をめざす。 ・全量基肥肥料栽培では、分施肥系と同等量の総窒素量を施用する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・田植えは 5 月中旬をめやすに、経営規模や水利条件等を考慮したうえで適切に設定する。 ・栽植密度は 50 株/坪を基準とし過度な疎植は避ける。 ・1 株苗数は 3~4 本とする。 ・植付深は 2~3cm を目標とする。 ・作付品種が変わるほ場では落下籾対策として初期除草剤ソルネット又はエリジアンを散布する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・中干しは、遅くとも田植え後 1 か月をめやすに開始し、出穂 1 月前までに終了する。 ・溝切りは中干しの効果を高めるとともに、フェーン等の緊急時の迅速なかん水のために必ず実施する。 ・6月下旬にケイ酸質肥料を追肥する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・いもち病に弱いことを十分考慮し葉いもちの予防防除と適期の穂いもち防除を徹底し、いもち病を発生・拡大させない。 ・葉いもち防除は、育苗箱施用剤による予防防除を必ず行う。 ・穂いもち防除は地域の防除実態や発生状況等に十分留意し、予防防除を行う。 ・カメムシ防除は畦畔等の草刈りと加害種に応じた薬剤防除を行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・穂肥は窒素成分で計 2kg/10a をめやすとし、出穂期 21~18 日前と 12~10 日前の 2 回に分けて施用する(全量基肥を除く) ・1 回目の穂肥は幼穂長を確認し、幼穂長が 5~10mm となった時期に施用する。 ・2 回目穂肥は葉耳間長が 0cm の時期に施用する。葉色低下が予想される場合、穂肥を追加する。 ・生育がめやすを大幅に超える場合は、施用量を控える。 ・出穂期 25 日後頃までは飽水状態の維持に努め、通水最終日には十分かん水する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・収穫適期は黄化籾割合 85~90% の頃で積算温度 1050~1100℃ がめやすである。 ・胴割れの発生を防止するため、適正温度・速度で行い急激乾燥しない。 ・成熟期前後にフェーンによる高温・極度の乾燥(籾水分 22% 未満で高飽差; 暫定値日平均飽差 6g/m² 以上)等に遭遇した場合、遅くともその日から 5 日以内に収穫する。 ・選別網目は 1.9mm 以上、色彩選別機の有効活用等で未熟粒等を除去し 1 等米に仕上げる。 ・成熟期頃が多雨の場合は穂発芽に注意する。

■推奨肥料

区分	肥料名	10a 当り施用量		
		砂質土壌	中間	粘土質土壌
土づくり	みやぎ有機(完熟発酵ケイフン)等	0~75kg		
	牛ふん堆肥、豚ふん堆肥等	0~500kg		
	みつパワー等	60~120kg		
育苗	稚苗苗代配合	30g/箱 x 18箱		
田植前追肥	くみあい液肥2号	270g(18~23箱)		
	べんとう肥	360g(18~23箱)		
基肥	越後の輝き有機 50 元肥	30kg		
	プレーバーペースト 734 等	42kg		
全量一発基肥	越後の輝き有機 50 スーパー元肥コング等	47kg		
ケイ酸肥料追肥	マルチサポ+Fe、スーパーシリカ、ウォーターシリカ、けい酸加里プレミア 34、ニューミスター等	15~40kg		
穂肥	味好 2 号、フジミハレット 731	出穂 23 日前頃	0~20kg	
	フェザ-MAX・みらい有機 831	出穂 3 日前迄	0~15kg	
	けい酸入りエコ・5-5 専用穂肥等	出穂 21~18 日前	穂肥診断より	10~12kg
		出穂 12~10 日前	原則	10~12kg
		合計 20~25 kg		

■推奨農薬

区分	農薬名	
種子病害の予防剤	温湯消毒+タフブロック等	
初期害虫・いもち病の予防剤	GP オリゼレディア箱粒剤 Dr.オリゼフェルテラ粒剤等	
水田除草剤	初期除草剤	ソルネット1キロ粒剤等 エリジアン乳剤・ジャンボ等
	一発処理剤	カウソルエナジー 1キロ粒剤・フロアブル・ジャンボ等
	ヒエ用 中期除草剤	グンチャー1キロ粒剤・EW・ジャンボ等 グンチャーバス ME 液剤等
	広葉雑草 中期除草剤	バサグラン粒剤・エア1 キロ粒剤・液剤等
いもち病・紋枯病の予防剤	フジワモンカハ粒剤(いもち・紋枯病)、 フジワン 粒剤、ブラシプロアブル(いもち病)等	
カメムシ類の防除剤	スタークル 粒剤・豆つぶ・液剤 10 等	
稲こぶ病予防剤	ドイツホルド-A 又は Z ホルド(粉剤 DL・水和剤)等	
紋枯病防除剤	バダシン液剤 5 等	

※農薬を使用する際は、必ず最新の使用登録内容を守ってください(農薬確認 令和8年3月)
(※慣行栽培の為、エコ・5-5 栽培等による制限はありません。)

本田初期害虫やイネアオムシ、いもち病は「GP オリゼレディア箱粒剤」又は「Dr.オリゼフェルテラ粒剤」等の使用で予防防除を徹底!
農薬が育苗ハウスに残留しないよう注意願います。

除草効果を高めるため、畦畔の漏水防止と代かき時の田面均平化に努め、移植後は 除草剤の適用条件内で早め処理しましょう!

■ 注意事項 ■
JA 米「新之助」のブランド確立と食味・品質の確保を図るため、次に掲げる事項に確実に取り組んでください。
(1) 県が定める水稲晩生品種「新之助」生産対策実施要綱及び実施要領を遵守して下さい。
(2) JA えちご中越ながおか新之助研究会が定める区分集荷・販売実施マニュアルに基づき、食味・品質の確保に取り組んでください。
<食味・品質基準>
① 整粒歩合 70%以上(農産物検査等級 1 等相当)、②水分含有率 14.0%以上、15.0%以下、③玄米タンパク質含有率 6.3%以下(水分 15%換算)
(3)新之助の食味・品質の確保に向けて、次の事項に的確に取り組んで下さい。
①栽培履歴の記帳 ②GAP の実践 ③毎年種子更新
④JA えちご中越ながおか新之助研究会区分集荷・販売実施マニュアルの遵守
(4) 基準未達及び取り組み確認が取れない場合は、「新之助」としての流通はできません。